

死刑について考えてみませんか

街を行くみなさん

この近くに東京拘置所があります。

そしてこの東京拘置所に、死刑を執行する刑場があります。執行のたびに何人かの職員は「国による殺人」に手を貸さねばなりません。今年もまた8月1日の朝に、ここで2名の執行がありました。

この4年間、年中行事のように死刑が執行され、特に東京拘置所は毎回、その処刑に加わっています。そのことに抗議する意味で、9月13日、老若男女およそ90人で綾瀬駅前から東京拘置所までデモをやりました。（たいへんお騒がせしました）

「母ちゃん、あの行列なんなの？」

「ついて行くんじゃないよ。デモ行進だよ。死刑が執行されたとか何とか言うてるでしょうが」

「あっ！ 太鼓叩いて踊ってる人もいるよ」

「ひまな連中だね。まったく」

「拘置所で仕事している人も一緒にやってるのかなあ？」

「まさか！ いるわけないよ。それこそ自分の首がとぶ」

「どうして？」

「どうしてもだよ。おとなになったらわかるよ！」

デモの道中、「おまわりさんも一緒にやってるの？」と子供たちがたずねたり、「どうせ身内が死刑囚なんだろう！」とビラを払いのけられたり、「死刑執行はやめましょう」の声に大きくなずく人がいたり、さまざまなことがありました。解散地点まで、関心をもってついてきた小学生もいました。おとな以上に子供たちの方が死刑について深く受け止めているのではないのでしょうか。

ところで、当日、拘置所側は、私たちが用意した「抗議ならびに要望書」を受け取るどころか、皆が近づくことさえいやがる有り様でした。

しかし、いきなり執行を告げられ、命を絶たれる死刑囚の驚きと無念さ…！ それは、日々彼らと接している拘置所の職員の方々こそ、よく知っているはずです。

その上、刑場へ連れて行く、目隠しをする、縄をかける…等々、執行にかかわる刑務官の皆さんの苦悩はどこで癒されるのでしょうか。死刑が続く限り消えないのではないでしょう

か？

世界の動きが死刑廃止へ向いている今、執行をいそぐのではなく、もっと死刑についての論議を、刑罰についての論議を尽くさねばなりません。

街を行くみなさん

わたしたちの身近に「死刑」があります。
立ち止まって、いっしょに考えてみませんか。